

ともはつよし社

新新聞とヤダ人

武田誠吾著

東京 歐亞通信社 丸の内

ともはつよし社

本書は昭和19（1944）年、株式会社欧亜通信社より刊行された『新聞とユダヤ人』の復刻版です。



ベンジャミン・フルフォード

シオン長老の議定書が偽書であったとしても、アメリカを支配している連中がやっていることは、シオン長老の議定書に書かれているシナリオ通り。実は自分が裏のシナリオに目覚めはじめた頃、日本でニンジャと名乗る人物から渡されたテープには、シオン長老たちが問題だと出ていた。

最近、このシオン長老の名前が表に出ている。たとえば小泉ジュニアが派閥を立ち上げたとき、サツスーンの金が行った。サツスーンと言えば、バビロニア、イラクの家族。そして中国の反日デモでも黒幕としてジェン・コーエンの名が挙がっていた。ある意味、シオン長老はすでに表に現われている。

しかし、ここで間違っていないけないこと、それはすべてのユダヤ人が一枚岩ではないことです。たとえば、すべてのロシア人マフィアはロシア人だけど、すべてのロシア人がマフィアなのではない。同じように一般のユダヤ人は、関係ない。シオニストがその中核なのです。

一般のユダヤ人はヤーウエという善良な神さまを拜む。シオニストはサタンを拜む。



船瀬俊介

このシオニストはナチスとも組んでいたことが判明した。つまりナチスとシオニストは同じだから、僕はナチオニストと呼びたい。

もしユダヤ教について非難するのであれば、タルムードにある「ゴイ」「ゴイム」という言葉。非ユダヤ人、これはおかしい。あまりに排他的なところだろう。

僕はこう思っている。ユダヤの人たちは聖書とかタルムードを子供の頃から読まされて育てられた洗脳された奴隷民族。これは2000年も前から続いている。いわゆるバビロニア式独裁の犠牲者。その上にいる悪魔崇拜のマフィア、羊飼いの人たちが問題なのだ。

これは、まさに第二次大戦敗戦後、禁書（焚書）とされた本だろう。

なにしろ、焦土の日本に乗り込んできたGHQ職員は、ほとんどだがフリーメイソン会員だった、と聞く。その中核は、まさに米英ユダヤ戦力だったのだから、本書などまっさきに焚書の憂き目にあっただろう。

しかし、日本を軍国主義から解放し、民主主義の国に育てる——というのが、彼らの日本占領の建て前だった。

進歩派と言われた日本人たちにとっては、まさに米英占領軍こそ、*「解放軍」* だった。その彼らが、日本の書物を *「没収」* *「焚書」* していたなど、夢にも思わなかったはずだ。情報公開こそ、民主主義の鉄則である。それを、*「かれら」* は自ら踏みにじったのだ。だから、GHQが民主的解放勢力であった、と信じた人たちは、戦中の軍国主義に続いて「二度騙された」ことになる。

本書に「今次大戦の放火犯人は米英アングロサクソンであり、国際ユダヤ勢力」と断じている。それは、まったく正しい。

一八七一年、すでにアメリカのフリーメイソン教皇、アルバート・パイクが来る第一次、第二次大戦を詳細に予言（予告）した衝撃事実は、よく知られている。

まさに *「かれら」* は未来の世界大戦まで、すでにプログラミングしていたのだ。

ユダヤ人が「寄生虫的生活を営んでいる」という下りは、ユースタス・マリンス著の『真のユダヤ史』（成甲書房）と見事に符合する。

本稿で詳述されている「シオンの議定書」は、二四の議定で構成され、一九〇三年にロシアで発見されている。ユダヤの長老達の秘密会議の議事録として、世界的な大ベストセラーとなった書物だ。

その内容は、ユダヤ人が世界征服するための具体的な方法論が叙述されている。

具体的には――*「国家・階級・世代・性別の対立を煽る」* *「民衆に対し、戦争や*

革命、暴動などの社会不安を誘発する」▼「メディアを利用した大衆の洗脳と白痴化の徹底」……など、空恐ろしいほどに、現代の地球社会と一致する。

つまり、寄生体であるユダヤ勢力は、その世界制覇の「策謀」を着々と進めていることになる。

「ロスチャイルドは、(イルミナティの創設者) ヴァイスハウプトにイルミナティをつくらせ、この『シオン議定書』に書かれた野望の達成を目指したのだ……」(『秘密結社の謎』並木伸一郎著 三笠書房)

ベンジャミン・フルフォード氏は「議定書が偽書であったとしても……」と真贋に疑問を呈している。しかし、その精緻さ、詳細さから、とても偽書とはいえないのではないか。同氏のいうとおり、アメリカや世界を支配している連中のやっていることは議定書の通りだからだ。まさに、これは闇のユダヤ勢力による世界征服のシナリオなのだと確信する。しかし、それ以外ではフルフォード氏の意見にまったく同感だ。

この議定書をもってユダヤ人を一括りで、総括、批判することはあまりに危険だ。それは、まさにヒトラーが犯した差別主義、排撃主義となんら変わらなくなる。

私にもユダヤ人の友がいる。一般のユダヤ人たちも、まさに「かれら」の犠牲者なのだ。同氏の造語「ナチオニスト」は、まさに言い得て妙。歴史用語として定着して欲しいくらいだ。一つ加えるなら、氏のいうごとく、タルムードの非ユダヤ人を指す「ゴイ

ム（獣）なる表現は、ユダヤ関係者、全員が反省とともに過去に封印すべきだと思う。ユダヤ人自体がバビロニア式独裁の犠牲者なら、^レかれら^レに征服された民族は、さらなる犠牲者なのだ。

それにしても本書が戦争中に日本人の手によって、書かれたことは驚嘆すべきだ。

ただ、著者は大日本帝国憲法は、ユダヤの影響なく、日本国民が樹立したもの……と自負しているが、これは間違いだろう。この憲法に基づき初代内閣総理大臣に選ばれた伊藤博文は、まさにフリーメイソン英国ロッジで、秘儀を受けたガチガチのフリーメイソン主要メンバーであることは、余りに有名な話だ。著者らも、まさかそこまでは思いがいたらなかったのだろうか。

また惜しむらくは、本稿は原典に忠実な余り、行替え、小見出しなどが無いので、読みづらい。また、著者名が複数としても判明しているのなら、記載されるべきだ。

この文献の信憑性、説得性がさらに増すものと思う。